

# 小・中学校における「総合的な学習の時間」の 調査研究について

- 子どもや教員はどのように変わろうとしているか -

海南市立異小学校  
教諭 岡谷憲子

## I はじめに

各学校で、教員が創意工夫を図り、特色ある「総合的な学習の時間（以下、「総合」と記す）」の取組が進められている。小・中学校において、平成14年度から新学習指導要領が完全実施され、「総合」がスタートしてまもなく2年を迎える。「総合」の取組を見直し、充実させる資料とするために、「総合」の調査研究を行うことにした。

## II 調査研究の目的・内容・方法

本研究の目的は、各学校における「総合」の取組の充実に役立てるために、県内における小・中学校別に「総合」の実施状況、成果、課題についての傾向を把握し、「総合」を充実させるための視点を提示することである。

調査内容は、「総合」の取組を進めていく上で学校の裁量となっていること、また工夫・改善が必要と思われることを柱とし、文献による研究を行い調査項目を作成した。調査は、平成15年8月、公立小・中学校435校（小学校297校、中学校138校）を対象として、質問紙法（選択式及び一部自由記述式）により実施した。

## III 調査結果

アンケート調査の回収率は100%であった。以下の表は、小・中学校別に集計し、まとめたものである。

### 平成15年度 小・中学校における「総合的な学習の時間」のアンケート〔調査結果〕

1 育てたい力について

数字の単位(%)  
(複数回答可)

項目	小	中
ア 自ら学び、自ら考える力	95	95
イ 友達と協力できる力	46	51
ウ 問題を解決する力	86	73
エ 情報を活用する力	61	72
オ 自分の思いや考えを伝える力	73	62
カ 自然に対するかかわり方を考える力	44	40
キ 人間や社会とのかかわり方を考える力	56	74
ク 自分のよさやよりよい自分の生き方を考える力	45	63
ケ その他	5	6
無記入	1	0

2 学習活動の内容について

(2) (1)で、アと回答した学校について

① 本年度実施予定の学習活動の内容

(複数回答可)

項目	小	中
ア 国際理解	19	12
イ 情報	16	9
ウ 環境	15	14
エ 福祉・健康	17	18
オ 児童生徒の興味関心に基づく課題	8	9
カ 生き方・職業・進路学習	2	16
キ 地域や学校の特色に応じた課題	21	17
ク その他	1	5
無記入	1	0

2 学習活動の内容について

(1) 学習活動の内容の決め方

項目	小	中
ア 学校全体で、学習活動の内容を決め、系統立てている	45	49
イ 学年ごとに、学習活動の内容を決めている（単学級の場合も含む）	51	51
ウ 学級ごとに、学習活動の内容を決めている	6	1
エ その他	7	7
無記入	1	0

② 学習活動の内容を決める際、重要視した理由

(複数回答可)

項目	小	中
ア 児童生徒の興味関心	14	16
イ 育てたい資質や能力	20	23
ウ 地域の特色	23	21
エ 教科等の学習内容との関連	13	5
オ 教師の専門領域	1	1
カ 保護者・地域の要望	2	0
キ 学校行事との関連	7	10
ク 子どもの主体性を重視した活動形態	11	13
ケ 今日の社会の課題	7	10
コ その他	1	0
無記入	1	0

(3) (1)で、イと回答した学校について  
① 本年度実施予定の学習活動の内容

(複数回答可)

項目	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
ア 国際理解	20	18	19	21	10	12	11
イ 情報環境	18	18	20	19	11	8	11
ウ 環境	10	20	15	10	20	10	10
エ 福祉・健康	12	16	12	14	13	16	14
オ 児童生徒の興味関心に基づく課題	11	9	10	13	10	12	14
カ 生き方・職業・進路学習	1	1	2	4	12	24	26
キ 地域や学校の特徴に応じた課題	25	16	20	17	23	17	13
ク その他	2	2	2	2	1	0	1
無記入	0	1	1	1	0	1	1

② 学習活動の内容を決める際、重要視した理由  
(複数回答可)

項目	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
ア 児童生徒の興味関心	17	16	16	16	18	20	19
イ 育てたい資質や能力	18	18	19	20	25	23	26
ウ 地域の特徴	25	20	18	17	19	15	11
エ 教科等の学習内容との関連	19	20	18	16	5	2	3
オ 教師の専門領域	1	2	1	1	1	0	1
カ 保護者・地域の要望	1	1	1	1	1	2	2
キ 学校行事との関連	5	5	7	9	6	7	9
ク 子どもの主体性を重視した活動形態	8	9	11	11	14	15	18
ケ 今日の社会的課題	6	7	7	9	11	13	10
コ その他	0	0	1	0	2	0	1
無記入	1	1	1	1	1	1	1

(4) (1)で、ウと回答した学校について  
各学級で学習活動の内容を設定した理由  
(記述による回答を省略)

3 名称について

(記述による回答を省略)

4 時間設定について (複数回答可)

項目	小	中
ア 授業時数を週、月、学期などに均等に配当している	47	40
イ 授業時数をある学期や時期に集中的に配当している	3	9
ウ アとイを適宜、配当している	53	57
エ その他(モジュール制やブロック制、ノーチャイム制等)	1	1
無記入	1	1

5 指導体制について

(1) 「総合的な学習の時間」の学校全体の指導計画を作成するにあたっての委員会等組織の有無

項目	小	中
ア はい(組織がある)	54	75
イ いいえ(組織がない)	44	25
無記入	2	0

(2) (1)で、アと回答した学校について

① 「総合的な学習の時間」の学校全体の指導計画を作成する委員会等組織の構成員

項目	小	中
ア 各学年の代表と「総合的な学習の時間」担当主任(教務主任)と管理職	46	53

イ 各学年の代表と「総合的な学習の時間」担当主任(教務主任)	26	29
ウ 各学年の代表	10	10
エ その他	14	7
無記入	4	2

(3) (1)で、イと回答した学校について  
「総合的な学習の時間」の学校全体の指導計画を作成する委員会等組織を作っていない理由

項目	小	中
ア 各学級担任で、作成しているから	37	14
イ 教職員全体で作成しているから	49	78
ウ その他	12	8
無記入	2	0

(4) 授業の指導体制

項目	小	中
ア 複数学年の教職員	12	7
イ 同学年の複数教職員	27	56
ウ 学級担任一人	34	2
エ 学校全体	15	27
オ その他	24	6
無記入	3	5

6 家庭・地域社会との連携について

(1) 家庭や地域の意見の把握

項目	小	中
ア はい(把握している)	21	22
イ いいえ(把握していない)	78	78
無記入	1	0

(2) 「総合的な学習の時間」を理解してもらう方法  
(複数回答可)

項目	小	中
ア 学校便り、学年通信、学級通信等	96	94
イ PTAの会議や学級懇談会、地区懇談会等	72	77
ウ 授業参観	77	41
エ 学校公開	46	48
オ 授業計画作成への参加	1	0
カ 授業への参加	37	13
キ 学校のホームページ	16	13
ク その他	3	8
無記入	2	0

(3) 地域の特徴の反映のさせ方 (複数回答可)

項目	小	中
ア 地域の自然を学習に生かしている	73	51
イ 地域の産業を学習に生かしている	59	62
ウ 地域の地理・歴史・文化を学習に生かしている	62	59
エ 地域の公民館等の施設や公園や広場等を活用し、学習に生かしている	41	31
オ 地域の方の協力を得て、学習を行っている	87	80
カ その他	1	5
無記入	1	1

7 評価について

(1) 教職員で確認し、共通理解を図ったこと

(複数回答可)

項目	小	中
ア 活動の記録をとること	75	74
イ 発表会での相互評価	40	58
ウ 評価の視点と内容	66	59
エ 毎時間の自己評価	14	27
オ 数値的評価をしないこと	40	47
カ 資料の保存	65	74
キ 子どもたちの活動の評価	60	66
ク のらいを明確にすること	59	48
ケ 意欲、リーダー性の評価	24	30
コ 年度末の発表会での評価	19	32
サ その他	0	1
無記入	1	0

(2) 取り入れている評価者と評価の方法

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	単独の教師による評価	74	29
イ	複数の教師による評価	53	79
ウ	児童生徒同士による相互評価	55	51
エ	児童生徒自身による自己評価	73	67
オ	交流した学校の児童生徒の評価	3	0
カ	活動に関わった学校外の人による評価	12	18
キ	その他	0	1
	無記入	1	0

(3) 評価の方法 (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	児童生徒の活動の状況の観察	97	97
イ	児童生徒の自己評価、相互評価	73	81
ウ	ポートフォリオ評価 (児童生徒の努力、進歩あるいは学力達成を示すワークシート、評価カード、作品や資料等の目的的な集積による評価)	61	54
エ	デジタルポートフォリオ評価 (コンピュータ上に児童生徒の活動の成果を保存したものによる評価)	10	5
オ	その他	0	1
	無記入	1	0

(4) カリキュラムを振り返るときに意見を参考にしている人 (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	自校の教師	97	95
イ	保護者	14	13
ウ	研究者	6	4
エ	児童生徒	22	28
オ	その他	7	7
	無記入	1	0

(5) 指導要録における観点 (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	「総合的な学習の時間」のねらいから決めている		
	a 課題設定の能力	51	49
	b 問題解決の能力	69	64
	c 学び方、ものの考え方	52	54
	d 学習への主体的、創造的な態度	61	77
	e 自己の生き方	28	38
イ	教科との関連から決めている		
	a 学習活動への意欲・関心・態度	15	7
	b 総合的な思考・判断	11	6
	c 学習活動に関わる技能・判断	14	6
	d 知識を応用し総合する力	9	4
ウ	各学校の定める目標、内容に基づいて決めている (例 コミュニケーション能力、情報活用能力)	20	15

8 教科・領域等の関連について (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	教科・領域の学習から「総合的な学習の時間」へ発展する形	80	43
イ	「総合的な学習の時間」から教科・領域等の学習へ発展する形	33	25
ウ	「総合的な学習の時間」に必要な教科・領域等の力を補う形	25	24
エ	「総合的な学習の時間」の中に教科・領域等が含まれる形	30	41
オ	その他	1	3
	無記入	0	0

9 充実させるための研修について

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	外部講師を招聘しての研修	32	24
イ	文献による「総合的な学習の時間」に関する研修	54	70
ウ	「総合的な学習の時間」の授業研究に	56	22

項目		(複数回答可)	
		小	中
エ	よる交流		
	他校の「総合的な学習の時間」の研究会に参加	67	65
オ	コンピュータの操作、ものづくり、英会話等の実技研修	60	36
カ	その他	4	3
	無記入	1	1

10 充実させるために必要なこと (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	時間配分の仕方	32	43
イ	指導のための準備	56	55
ウ	地域素材の教材化・人材活用の方法	86	78
エ	学習指導の方法	43	33
オ	教科の学習内容との関連	47	37
カ	評価の方法	55	50
キ	評価規準の作成	35	25
ク	児童生徒の興味関心の生かし方	64	65
ケ	発達段階を踏まえての活動内容の系統化	46	46
コ	各教科の基礎基本の定着	47	36
サ	担当者のリーダーシップ	8	16
シ	推進のための組織体制作り	12	25
ス	小学校と中学校等、異校種の連携	17	30
セ	施設設備の充実	26	36
ソ	その他	1	1
	無記入	1	3

11 「総合的な学習の時間」実施による児童生徒の変容 (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	課題意識を持って、主体的に活動に取り組めるようになってきた	49	35
イ	身近な課題への興味・関心が高まってきた	63	61
ウ	情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方等の学び方が身に付いてきた	77	78
エ	学習の過程で学んだことを、次の学習に生かせるようになってきた	18	15
オ	各教科で身に付けた知識や技能を「総合的な学習の時間」で生かしたり、また「総合的な学習の時間」で学んだことを各教科等で生かしたりできるようになってきた	35	22
カ	「総合的な学習の時間」を通して教師や保護者・地域の人々との関わりがより強くなってきた	64	65
キ	学習体験を振り返ることを通して、自己の個性やよさに気付くようになってきた	15	40
ク	計画性を持って、活動に取り組めるようになってきた	14	23
ケ	その他	0	1
	無記入	1	1

12 「総合的な学習の時間」実施による教師自身の成果 (複数回答可)

項目		(複数回答可)	
		小	中
ア	教育内容の精選が進んだ	16	9
イ	児童の興味関心を引きつける教材開発の意欲が高まった	44	38
ウ	教科学習では見られなかった児童の力や成長、学習意欲を見ることができた	88	89
エ	地域・家庭との連携が深まった	64	54
オ	教師間の連携が深まった	27	37
カ	教科の授業において、児童が主体的に学べるような、問題解決的な学習が多く取り入れられるようになった	34	17
キ	児童と教師間のコミュニケーションがさらに深まった	32	59
ク	その他	2	0
	無記入	1	1

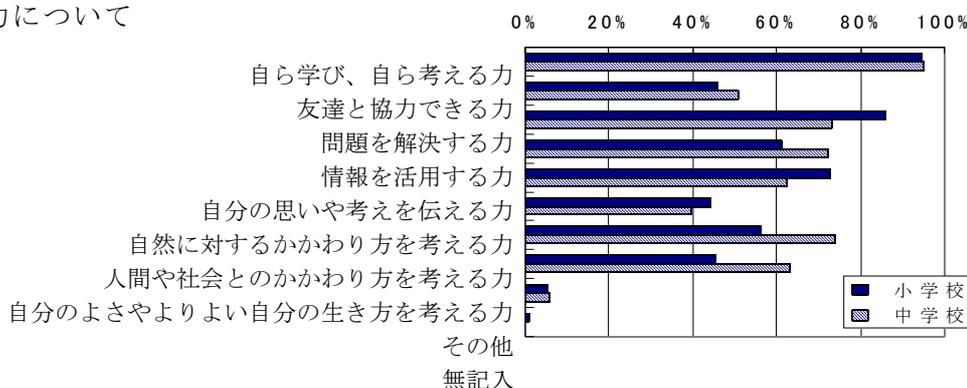
#### IV 調査結果の分析・考察

実施状況の把握は、「育てたい力」「学習活動の内容」「名称」「評価」「時間設定」「指導体制」「家庭や地域社会との連携」「教科・領域等との関連」の項目で行った。

成果は、「実施による児童生徒の変容」「実施による教師自身の成果」を中心に把握し、実施上の課題は、「充実させるのに必要なこと」「充実させるための研修」を中心に、その他の項目も合わせて把握した。

分析・考察については、紙面の都合上、調査結果より抽出して行うこととした。

##### 1 育てたい力について



(図1) 育てたい力 (複数回答)

「自ら学び、自ら考える力」が最も多く、小・中学校ともに9割を超えている。このことは、「総合」の創設意図と各学校の目標が一致した結果であると思われる。

小学校で中学校より割合が高かったのは、「問題を解決する力」「自らの思いや考えを伝える力」である。中学校で小学校より高かったのは「情報を活用する力」「人間や社会とのかかわり方を考える力」「自分のよさやよりよい自分の生き方を考える力」である。

##### 2 学習活動の内容、名称及び教科・領域等との関連について

###### (1) 学習活動の内容

学習活動の決め方は、小・中学校ともに「学年ごとに学習活動の内容を決めている」(小学校45%、中学校49%)が、「学校全体で学習活動の内容を決めている」(小・中学校51%)を少し上回っている。調査前の予想とは異なり、一部に複数回答が見られた。内容により学校全体や学年、学級で決めていることが予想される。

小学校		中学校	
地域や学校の特色に応じた課題	21%	福祉・健康	18%
国際理解	19%	地域や学校の特色に応じた課題	17%
福祉・健康	17%	生き方・職業・進路学習	16%

(表1) 「学校全体で、学習内容を決め、系統立てている」と回答した学校における、学習活動の内容 (複数回答)

「学校全体で、学習活動の内容を決め、系統立てている」と回答した小学校134校、中学校67校の中で、学習活動の内容として割合の高いものを3つ、(表1)に挙げた。小・中学校ともに「地域や学校の特色に応じた課題」「福祉・健康」の割合が高い。「地域や学校の特色に応じた課題」が高い理由として、身近な素材から課題づくりができ、活動の場として取り入れやすいからと考えられる。大きく異なるのは小学校では「国際理解」が、中学校では「生き方・職業・進路学習」の割合が高いことである。

次に、「学年ごとに、学習活動の内容を決めている(単学級の場合を含む)」と回答した小学校151校、中学校70校の中で、学習活動の内容について割合の高いものを3つ、(表2)に採り上げた。小学校では「国際理解」「情報」「地域や学校の特色に応じた課題」が高く、中学校(特に2・3年生)で「生き方・職業・進路学習」が高い。

「学級ごとに、学習活動の内容を決めている」と回答した小学校18校、中学校1校は、その理由として「教師の個性重視、学級担任の創意工夫」「学級の児童の実態に即して」「児童の興味関心を大切に」等の記述が多く見られた。

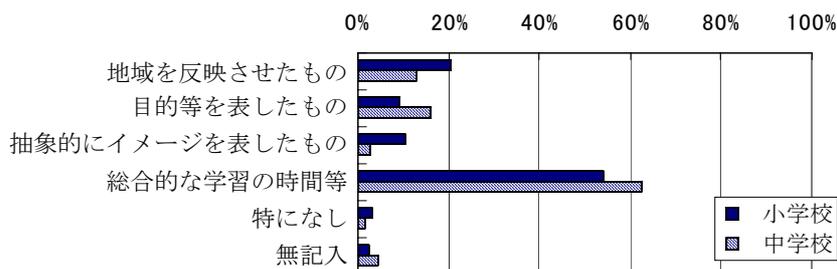
小3		小4		小5		小6		中1		中2		中3	
地域や学校の特色に応じた課題	25%	環境	20%	情報	20%	国際理解	21%	地域や学校の特色に応じた課題	23%	生き方・職業・進路学習	24%	生き方・職業・進路学習	26%
国際理解	20%	国際理解	18%	国際理解	20%	情報	19%	環境	20%	地域や学校の特色に応じた課題	17%	福祉・健康	14%
情報	18%	情報	18%	地域や学校の特色に応じた課題	20%	地域や学校の特色に応じた課題	17%	福祉・健康	13%	福祉・健康	16%	生徒の興味・関心に基づく課題	14%

(表2) 「学年ごとに、学習内容を決めている」と回答した学校における、学習活動の内容 (複数回答)

(2) 「総合的な学習の時間」の名称

名称について、各学校の記述を分類した。小・中学校ともに、「総合的な学習の時間」「総合」をはじめ「総合的な学習」「総合の時間」「総合学習」「総学」といった名称が5割を超えていた。

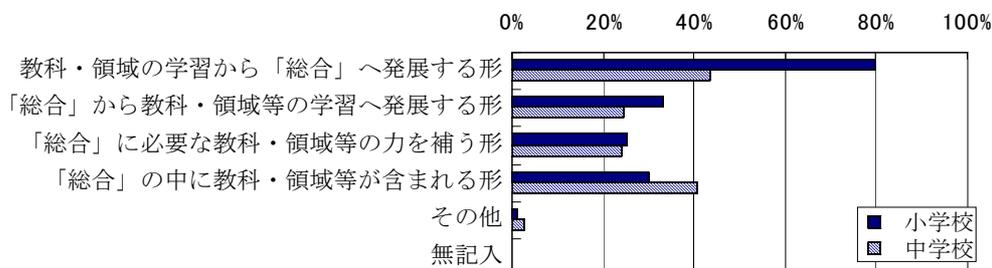
次に割合が高かったのは、小学校では「地域を反映させた(学校名、地名、地域の環境にちなんだ)もの」で、中学校では「目的を名称としているもの」であった。調査前の予想とは違い、名称に各学校の特色や方向性がうかがえるものは少なかった。



(図2) 「総合的な学習の時間」の名称

(3) 「総合的な学習の時間」と各教科・領域等の関連

小・中学校ともに、教科・領域の学習から「総合」へ発展する形(教科発展型)が多い。小学校では、この関連方法が8割に達した。教科・領域の学習での問題意識を発展させたり、教科・領域で身に付けた知識・技能を応用または統合したりする場合は考えられる。



(図3) 「総合的な学習の時間」と教科・領域等との関連 (複数回答)

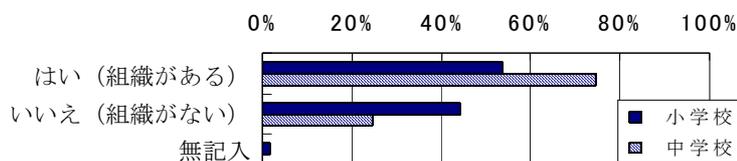
3 時間設定について

『授業時数を週、月、学期などに均等に配当』と『授業時数をある学期や時期に集中的に配当』を組み合わせている」と回答した割合(小学校53%、中学校57%)が5

割を超えた。各学校において弾力的に時間割を編成する工夫が進んでいると考えられる。

#### 4 指導体制及び家庭や地域社会との連携について

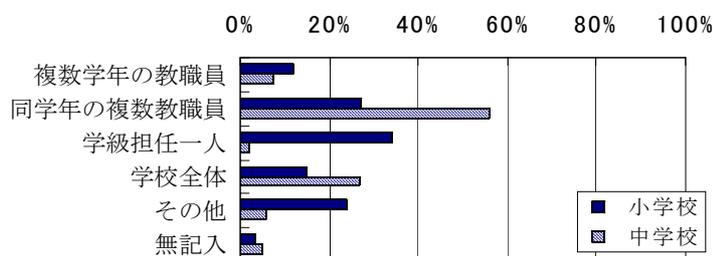
##### (1) 学校全体の指導計画を作成する委員会等の組織や授業の指導体制



(図4) 「総合的な学習の時間」の学校全体の指導計画を作成するにあたっての委員会等組織の有無

「はい (組織がある)」と回答した学校 (小学校54%、中学校75%) が小・中学校ともに多く、特に、中学校で割合が高くなっている。中学校では教科担任の専門性を生かすことが多く、組織作りをして話し合いを進めた方が「総合」の運営がしやすいためであると思われる。小学校では、「いいえ (組織がない)」の割合が44%あり、少なくはない。「はい (組織がある)」の割合と比べても10ポイント低くだけであり、中学校の「いいえ (組織がない)」の割合と比べると19ポイント上回っている。

「いいえ (組織がない)」と回答した学校 (小学校132校、中学校34校) において、委員会組織を作っていない理由として最も割合が高かったのは、小・中学校ともに「教職員全体で作成しているから」で、中学校でより高くなっている。また、「各学級担任で作成しているから」という理由は小学校では約4割と高めである。中学校では1割余りであった。「その他」に挙げられていた理由は、小学校では「小規模なので組織は無理」「各学年で作成しているから」であった。組織がなく、全教職員で推進する場合でも、それぞれの役割分担を明確にし、組織的に推進していくことが望まれる。



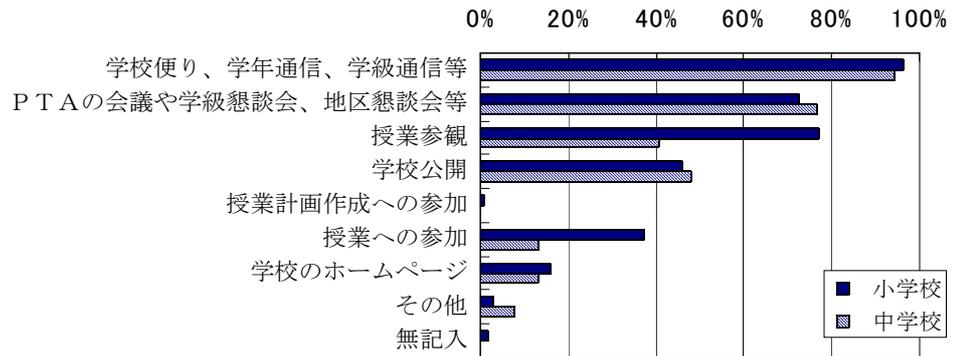
(図5) 授業の指導体制

授業の指導体制について、校種により大きな違いが見られた。小学校では「学級担任一人」と「同学年の複数指導教職員」による指導が中心であり、中学校では「同学年の複数教職員」による指導が中心である。小学校の学級担任制と中学校の教科担任制による違いであると思われる。中学校では、学習活動の内容を深めるために関係する教科担当の指導や支援が必要であり、複数教員の協力が不可欠であるからだと考えられる。一部に複数回答が見られた。

また、その他の記述より、小学校71校では、学級担任の他、例えば「ALT」「情報担当者」「家庭や地域の方」「養護教諭」「管理職」等で、学習活動の内容及び形態等により必要に応じて工夫し、指導にあたっていることがわかった。こうしたことから、子ども一人ひとりの多様な個性を受け入れる体制を広げている実態がうかがえる。

##### (2) 家庭や地域社会との連携

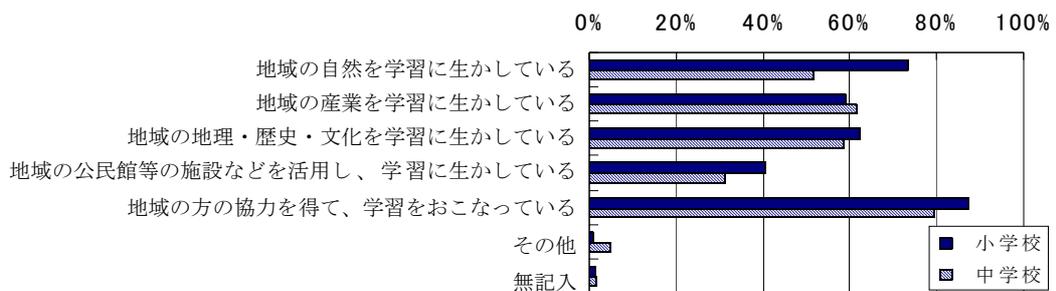
各学校が家庭や地域の意見をアンケート等の方法により具体的に把握しているかどうか調査したところ、小・中学校ともに、「はい (把握している)」と回答した学校は2割であった。



(図6) 「総合的な学習の時間」を理解してもらう方法 (複数回答)

「総合」のねらいや学習活動の内容を理解してもらう方法としては、小・中学校ともに「学校便り、学年通信、学級通信等」や「PTAの会議や学級懇談会、地区懇談会」が多い。「授業参観」は小学校では約8割、中学校では4割である。「授業への参加」は小学校では約4割、中学校では1割余りであった。

このことから、理解してもらう方法として、学習活動について知らせる方法が多くとられていることがわかった。子どもたちの学習をともにつくっていくことは、まだまだあまり実施されていない状況がうかがえる。



(図7) 地域の特徴の反映のさせ方 (複数回答)

地域の特徴の反映のさせ方の調査で、小・中学校ともに割合が最も高かったのは「地域の方の協力」であった。次に割合が高かったのは、小学校では「地域の自然」で、中学校では「地域の産業」であった。子どもの学習段階による学習活動の内容の違いによるものと思われる。

#### 5 「総合的な学習の時間」の評価について

##### (1) 評価について教職員で確認し、共通理解を図ったこと

小・中学校ともに「活動の記録をとること」「評価の視点と内容」「資料の保存」「子どもたちの活動の評価」「ねらいを明確にすること」が5割を超えた。

##### (2) 評価者

小学校では「単独の教師」、中学校では「複数の教師」が最も割合が高かった。「児童生徒自身」も小・中学校ともに高く、7割を超えていた。次に「児童生徒同士」が高く、5割であった。さまざまな評価者により、客観的に評価できるように進められていることがうかがえる。

##### (3) 評価方法

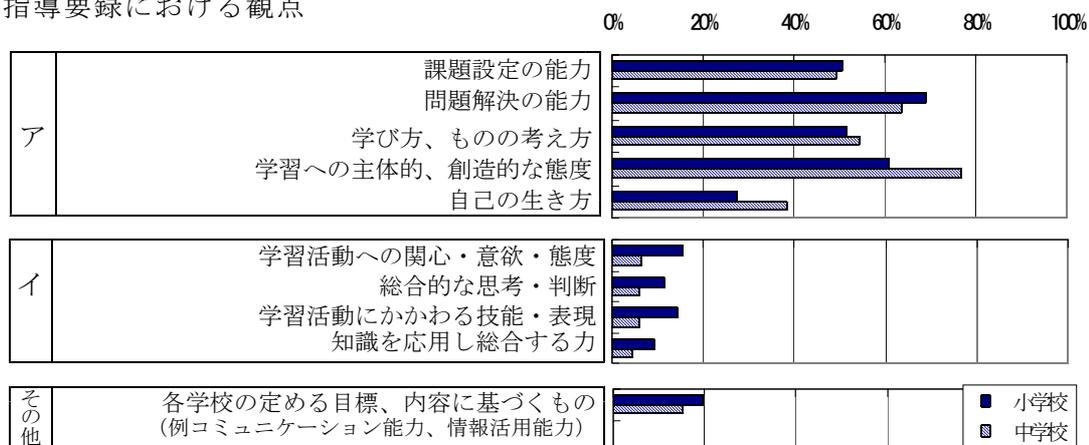
「児童の活動状況の観察」が最も多く、9割を超えた。「児童生徒の自己評価・相互評価」は小学校で7割を超え、中学校では8割であった。「ポートフォリオ評価」については、小・中学校ともに約6割の学校で取り組まれている。いろいろな評価方法を取り入れ、多面的な評価が進められている。

##### (4) カリキュラムを振り返るときに意見を参考にしている人

「自校の教師」が最も多く9割を超え、次に「児童生徒」が約2割、「保護者」

が1割余り、「研究者」が1割未満であった。小・中学校ともに同様の傾向を示した。その他からは、指導主事、学校評議員、地域の方、ゲストティーチャー、保護者、他校の教師等が挙げられていた。

(5) 指導要録における観点



アは「総合的な学習の時間」のねらいを踏まえた観点  
イは各教科との関連を踏まえた観点

(複数回答)

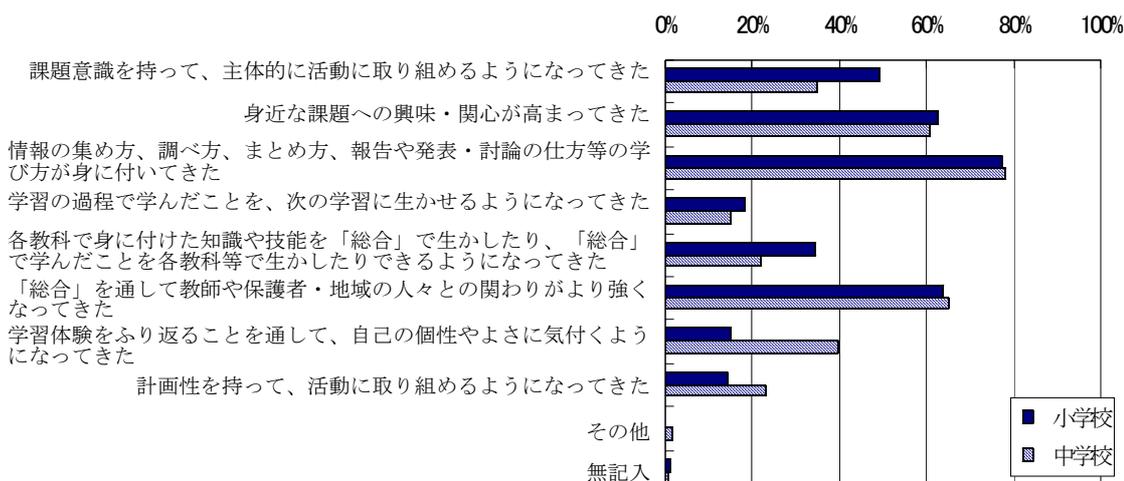
(図8) 指導要録における観点

指導要録における観点について、小・中学校ともにほぼ同様の傾向を示している。「総合」のねらいから抽出された観点の割合が高く、「問題解決の能力」「学習への主体的創造的な態度」の割合が高かった。これらの観点は、育てたい力の中で割合が高かった「自ら学び自ら考える力」「問題を解決する力」と整合性があると考えられる。

各学校の定める目標、内容に基づいて決めている学校は、小学校58校、中学校22校であった。その観点は、例えば小学校では、「ともに学ぶ力」「郷土を愛する心」「自然や人に関わる力」「自己表現力」「自分の考えを実践する力」「自己評価力」等であった。中学校では、「自ら調査し表現する力」「地域社会にかかわり、ともに学ぼうとする態度」「責任感」等であった。

6 「総合的な学習の時間」実施による成果

(1) 「総合的な学習の時間」実施による児童生徒の変容



(図9) 「総合的な学習の時間」実施による児童生徒の変容 (複数回答)

児童生徒がどのように変わったかについて、小・中学校ともに最も割合が高かったのは「情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方等の学び方が身に付いた」であった。

次に高かったのは、「総合を通して教師・保護者・地域の人々との関わりが強

なった」「身近な課題への興味・関心が高まってきた」である。

小学校では、中学校より「各教科で身に付けた知識や技能を総合で生かしたり、また総合で学んだことを各教科で生かしたりできるようになってきた」が高い。小学校においては、学級担任がほとんどの授業に関わることから、各教科と「総合」を関連させ、学習したことや身に付けたことを双方向に生かす場面を設定することが容易なためではないかと考える。「課題意識をもって主体的に取り組めるようになってきた」も中学校より高くなっている。

中学校では、小学校より「学習体験を振り返ることを通して、自己の個性やよさに気付くようになってきた」が高く、中学校では「生き方・職業・進路学習」の学習活動が多く設定されていることから、学習活動を通して育てたい力が付いてきていると予想される。

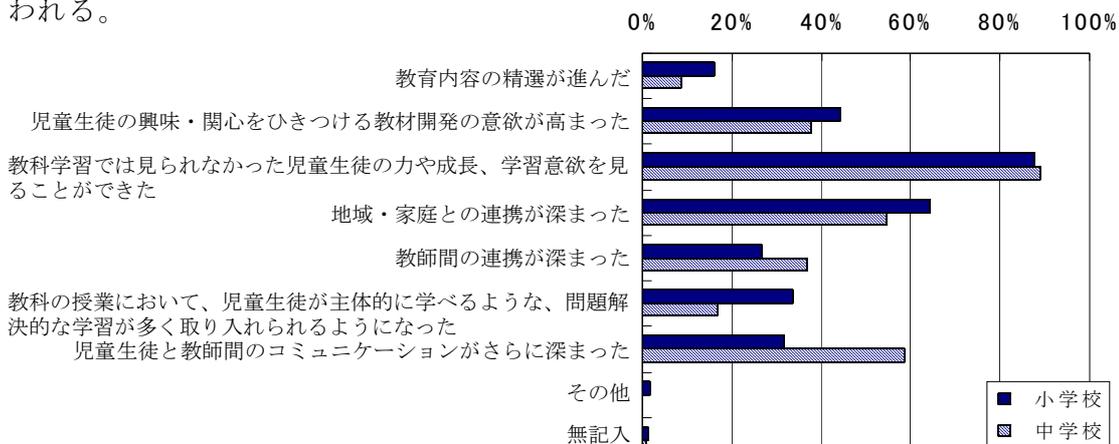
小・中学校ともに低かったのは、「学習の過程で学んだことを、次の学習に生かせるようになってきた」で、授業の中に学んだことを生かせる機会を設定できているかどうかを見直すという視点が必要である。

(2) 「総合的な学習の時間」実施による教師自身の成果

教師の成果として小・中学校ともに最も割合が高かったのは「教科学習では見られなかった児童生徒の力や成長、学習意欲を見ることができた」でほぼ9割を占める。「地域・家庭との連携が深まった」も小・中学校ともに割合が高い。

中学校では「児童と教師間のコミュニケーションがさらに深まった」の割合が高くなっている。

「教師間の連携が深まった」（小学校27%、中学校37%）は予想に反して低く、わずかに中学校の方が10ポイント高いが、今はまだ成果とは言い難いのではないかと思われる。



(図10) 「総合的な学習の時間」実施による教師自身の成果 (複数回答)

7 「総合的な学習の時間」をさらに充実させること

(1) 充実させるための研修

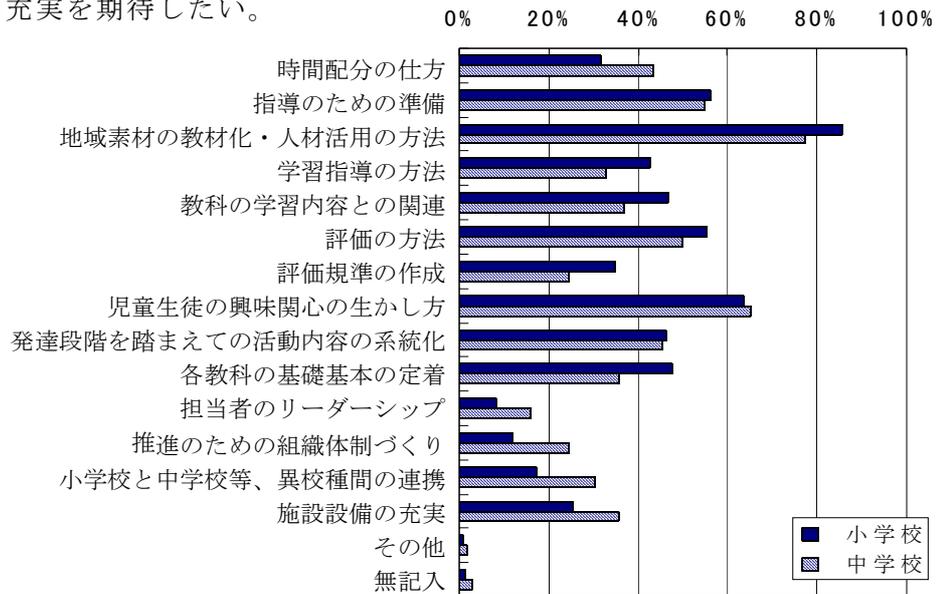
各学校で行われている研修内容の中で、小・中学校ともに割合が高かったのは、「他校の研究会への参加」や「実技研修」であった。中学校では「文献による研修」が最も高かった。「授業研究による交流」は、中学校より小学校で高くなっていた。

(2) 充実させるために必要なこと

小・中学校ともに割合が最も高かったのは、「地域の素材の教材化・人材活用の方法」である。活用する施設、人材の連絡先、次年度に生かせるような資料を記録に残すことや、協力機関や協力者との調整時間の十分な確保等が考えられる。他に、「児童生徒の興味関心の生かし方」「指導のための準備」「評価の方法」が挙げられる。

小学校では、中学校より「各教科の基礎基本の定着」「教科の学習内容との関連」「学習指導の方法」「評価規準の作成」の割合が高い。中学校では、小学校より「時間配分の仕方」、「施設設備の充実」、「小学校と中学校等異校種間の連携」「推進の

ための組織体制づくり」の割合が高い。研修等を通じて、「総合」についての共通理解と指導の充実を期待したい。



(図11) 「総合的な学習の時間を充実させるために必要なこと (複数回答)

#### V 「総合的な学習の時間」を充実させるために

調査結果から、子どもや教員の実態を踏まえ、「総合」を充実させるために必要なことについて、以下にまとめる。

- 1 子どもに付けなければならない力
  - ・友達と学び合う関わりを築く。
  - ・自分の意志で決定し学ぶ。
  - ・学習の成果を生かし、自分の意見や考えを持ち、発表したり討論したりできる。
  - ・地域の中で、主体的、創造的に活動し、自己の生き方について考える。
- 2 教員の課題
  - ・教員が互いに学び合い、協働する関係を築く。
  - ・一人ひとりの子どもの学びを保障するために、複数の教師による指導体制を作る。
  - ・保護者や地域の協力を得て、子ども理解、地域理解に積極的に努める。
  - ・保護者や地域の思いや願いを把握しつつ、学校の実態に即した単元・カリキュラムを作成する。
  - ・子どもの興味関心に寄り添い、子どもとともに学ぶ姿勢を大切にする。

#### VI 今後の研究の在り方

今後、指導方法や指導体制の工夫・改善を進めるにあたっては、評価について検討する必要がある。今回の本県の実態調査からも、「総合」を充実させるために必要なこととして約5割の学校が「評価の方法」と回答している。

例えば、「評価規準が学年間の系統性、整合性をはかり、校種間の接続も考慮して作られているか」「評価の具体的な方法・評価を行う場面・時期を明確にし、計画的に実施されているか」「自己評価が一つの単元の導入、展開、まとめで十分に生かされているか」「カリキュラムの評価がどのように行われ、生かされているか」等を検討することが重要と考える。

また、教科・領域との関連の在り方についての考えを深め、学習したことを相互に生かす場の設定が必要である。さらに、校内や校外において、児童生徒が主体的で多様な活動ができる学習環境の整備が必要と考える。例えば、外部機関との連携、地域の施設や人材の活用等、人的環境整備と施設設備の充実、体験的活動のための経費、物的環境整備等である。